



田中さんはいつも、ジャンルを超えた人たちの創造エネルギーの渦の中心にいて、見事なプロデューサーぶりを発揮した。グラフィックと立体の違いなど何もなげ、創ることの喜びがあった。いっしょに仕事をすると、勇気づけられもした。田中さんの遺志を継ぐのは容易ではないが、比較すべ

き「デザイン」の重要性に気づくことが、ひいては日本人の勇気につながるのではないかと。日本の20世紀を振り返れば、戦前の工業の運動から始まり、戦後は経済成長も手伝ってさまざまな分野のデザインが飛躍的に発展し、人々の生活に深く入り込んできた。プロダクトでは剣持勇氏や柳宗理氏、倉俣史朗氏ら、グラフィックでは亀倉雄策氏や田中一光氏の巨人たちがすぐれた仕事をし、日本デザインを世界水準に引

田中一光デザインの遺産

世界水準の「資源」生かして

き「デザイン」の遺産」の重要性に気づくことが、ひいては日本人の勇気につながるのではないかと。日本の20世紀を振り返れば、戦前の工業の運動から始まり、戦後は経済成長も手伝ってさまざまな分野のデザインが飛躍的に発展し、人々の生活に深く入り込んできた。プロダクトでは剣持勇氏や柳宗理氏、倉俣史朗氏ら、グラフィックでは亀倉雄策氏や田中一光氏の巨人たちがすぐれた仕事をし、日本デザインを世界水準に引

き上げてくれた。彼らの普遍的で汎用性のある仕事は、私たちの生活の一部となっている。また、日本のすぐれた企業デザインも忘れられない。日常品、家電品、建築や環境デザイン等。ファッション・デザインにおいても、世界のクリエーションをエキサイティングなものにしていくのは、日本のデザイナーであり、日本の素材であると言える。だが、独創的なアイデアや技

術、それにカタチを与えるデザインに對し、今の日本人はあまりにも無頓着である。オリジナリティのあるデザインによって、生活がうまく機能し、ひいては文化的、精神的な豊かさが育つことを、もっと意識すべきだ。有名ブランドばかりを追い掛けていくのは、何も始まらない。何か新しいことを始めようとする。「それはちょっとムリですよ」といわれる。さらに「お力ネがない」と続く。

そうじゃないでしょうか。わが国の後しさは、物質的なものではなく、精神的な自信のなさに由来している。それは、美術やデザイン行政の無策ぶりに、企業や文化事業からの後退に、そして明日に希望を持たない若者たちの姿に、端的に表れていると思う。

面白いアイデアがどんどん出て、街も人も元気が出てくる……。そうした状況をつくり出したいなら、先人たちが遺したすばらしいデザイン遺産を保存・紹介し、未来に向けて同時代の動向も示す「デザインミュージアム」をつくらう。一つの大きなシンボルとなつて、世界各地からたくさんの人々を引きつけてくれるはずだ。

三宅 一生



デザイナー

みやけ・いっせい 38年広島県生まれ。63年多摩美大卒。パリとニューヨークで学んだ後、70年に三宅デザイン事務所を設立。パリ・プレタポルテ・コレクションには73年から参加、斬新で創造力豊かなデザインと、素材づくりの独創性で知られる。92年に朝日賞、98年に文化功労者。

るばかりでなく、いつかこの大事業をもう一度考えよう。「明日があるさ」という歌が、リバイバルで少し前にはやった。けれども明日をつくるには、田中一光さんも書いていたとおり、比較するものが欠かさない。「今、なんだか、日本、が面白い」

最後に、自分自身の感懐を。デザインの仕事は、じつに面白い。私がこの仕事をなんとかめげずにやってこられたのは、「デザインには楽しみはそぐわない、デザインには希望がある、そして、デザインは驚きと喜びを人々に届ける仕事である」というまことに単純な理由からである。